

平成 21 年 6 月 8 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007～2008

課題番号：19720201

研究課題名（和文） 近世武家儀礼に伴う食膳形態の形成と変容
—遺跡出土の什器組成に関する考古学的研究—

研究課題名（英文） The Archaeological Study of Dishes for Ceremony in the Edo Era.

研究代表者

追川 吉生 (OIKAWA YOSHIO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助手

研究者番号：60313178

研究成果の概要：江戸時代の武家における宴会儀礼には、前代同様カワラケが用いられたが、18世紀後半以降その使用は簡略化された。その一方、新種の国産磁器や茶の湯が新たに加わった。18世紀後半になると武家屋敷以外でも宴会の遺物が出土するようになり、現在の我が国にみられる宴会の基礎となった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	180,000	1,480,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：歴史考古学 近世 江戸

1. 研究開始当初の背景

江戸時代の武家の宴会は、前時代の武家儀礼からの形態を整えながら、下級武士や広く社会へと普及する。この過程を考古学的に考察し、日本の食形態の変遷を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の目的

上記過程で、新しい食器（磁器）が宴会の食器組成の中に取り入れられ、やがて従来の食器組成を変えていくかといった点から考察する。

3. 研究の方法

大名屋敷、旗本・御家人屋敷、町人地といった遺跡毎に、遺跡から出土する磁器・陶器・土器・漆器の組成のあり方といった、考古学的方法を中心に実施する。

4. 研究成果

18世紀になると武家地では磁器が宴会儀礼にも取り入れられるようになる。その一方、従来のカワラケも使用されるが、同一サイズのカワラケに大・中・小というサイズを墨書して代用するような儀礼の簡略化も認められた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

(1)追川吉生、17 世紀のかわらけ一括廃棄遺構の様相、在地系土器研究会、2007 年 9 月 29 日、東京大学

(2)追川吉生、江戸遺跡から出土する茶の湯道具 大名屋敷の発掘調査事例を中心に 茶の湯文化学会、2008 年 9 月 27 日、五島美術館

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1)研究代表者

追川 吉生(OIKAWA YOSHIO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助手

研究者番号：60313178

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし